

※「海外だより」は、本号をもって終了します。
令和8年度からはあらたに「グローバルヘルスの窓から」
として、年3回掲載をはじめます。

豊かさとは何か ～ベトナム研修の贈り物～

国立健康危機管理研究機構 国際医療協力局 人材開発部

研修課 山本 真央

「豊かさとは何か」一。

日頃、日々の忙しさの中で、また恵まれた環境で不自由なく生活している状況で、自身に問うこともなかったこの言葉を、あらためて考えさせられた出来事、それが初めて参加した9月の「2025JIHSグローバルヘルス・フィールドトレーニング」であった。

今回、原稿執筆の機会を得たので、その経験を振り返り、筆をとりたいと思う。

◇国際医療の舞台に飛び込んで◇

「Xin chào (こんにちは)」「Xin cảm ơn (ありがとう)」一。ベトナムの医療現場で、そこで働く人々と笑顔で挨拶を交わす機会が訪れようとは、半年前には全く想像もしていなかった。

今年の春から、ご縁を得て配属された国際医療協力局という場所は、前職とは180度違う世界であった。

医療研修を通じて世界規模の課題に取り組む私の職場では、英語や仏語の会話が当たり前聞こえてくる。職員の誰かは必ず海外に出張し、給湯スペースからは毎日違う世界のコーヒーの香りがする、其処此処で交わされる楽しい会話は出張の土産話という、とてもユニークな職場である。

海外旅行が大好きで、語学が苦手ながらも海外に関わる仕事をするのがひそかな夢だった私にとって、この職場はとても刺激的で、魅力的である。

一方で、事務職である自分は、海外出張など夢のまた夢だと思っていた。

ところが、入職して一か月が過ぎたころ、上司か

ら言われたのは、「海外行ってみない?」。まさに夢のような言葉だった。

こうして私は、運営スタッフ兼参加者として、ベトナム研修へ参加することになった。

◇いざベトナムへ◇

9月中旬、日本の四季が夏から秋へと変わる頃、不安と期待で揺れる心を表したような翡翠色の機体で、ベトナムへと旅立った。

この研修は、「グローバルヘルス・フィールドトレーニング」といい、低・中所得国の医療や保健衛生環境の改善・向上を目的に、実際に現地に赴き、課題解決のプロジェクト策定をする実践的なもので、今年度はベトナムでの開催となった。

職場も部署も職業も違う23人のメンバーで行われたこの研修は、約一週間の滞在で、ベトナムの医療事情、生活環境、文化をみっちり学ぶことができた。



図1 ホアビンの民俗村への文化視察の様子

る。また、首都ハノイから南西に約80km、車で約2時間行ったところにあるホアビンという都市の総合病院では、3日間会議室を借り、病院スタッフと病院の課題について意見交換や解決方法を考えるグループワークを行う。最終的には、その結果を一つのプロジェクトにまとめ、発表会という形で院長や副院長へプレゼンテーションし、病院でのプロジェクト実施に繋げることがミッションである。

今回取り上げられた病院の課題はいずれも、喫緊の対応が必要なものであり、実現性の高さを解決方法の検討の重点に置いた傾向にあった。それ故、いくつかのアプローチは即採用してもらえる可能性が高く、研修以上の成果を得たのではないと思う。

また、私は参加者兼スタッフ、そして事務職として複数の視点で携わることができた。これによって、成果に至るまでの多くの困難と障壁、成果を多角的に捉える事が出来たように思う。

◇国の壁を感じて◇

今回の研修では、プロジェクトの策定に際し、ProjectCycleManagement=PCMという手法を用いたワークショップを実践した。この研修は、プロジェクトを図表化したProjectDesignMatrix=PDMを作成することが最終目標であり、その過程で行うのがPCMである。PDMを作成するためには、ベトナム側と日本側、両者の見解・認識を一致させていかなければならない。しかしそれが、何よりも難しいことであった。

最大の障壁は、双方、病院の体制はもちろん、国柄も文化も、国家制度もあらゆることが異なる中で、一つの目標達成のプロセスを組み立てる際、互

いの提示するアプローチに対し、各々の考えを理解することが容易ではないという点である。例えば、一つの医療機器を調達することは、日本では整ったシステムと確保された予算によって比較的簡単に短期間でできる。一方でベトナムではそれが、国家プロジェクトになるうえ、何年も年十年もかかる。そうしたペースの違いが、意見の食い違いとなり、度重なるPDMの再考に悩まされる結果となった。

◇壁を乗り越えた先に◇

多くの困難を抱えながらも、私達は最終的にプロジェクトの策定を成し遂げなければならない。ではどうすべきか。何よりもまずは、「相手をよく知ること」である。私達は、病院の現状と課題をより深く、より実感を以って理解するために、病院見学の機会を得た。幸いなことに今回の見学では、比較的スムーズに施設・設備等を見せてもらうことが出来た。(先に記載したように、国家の仕組みが違うために、見学・公開出来る範囲や許可がその時々により一様ではない。)

「百聞は一見に如かず」と云うが、実際に現場を見ることが、“自分の常識=相手の常識ではない”ことの気づきとなり、PDMのプロセスを根本から見直すきっかけとなった。病院の現状から、最初のアプローチより更にかみ砕いた工程が必要ということに気が付いた私達日本側は、更に問題点を掘り下げて詳細に検証を行った。その結果、ベトナム側も様々な意見や回答をくれるようになった。そうして、意思疎通ができるようになると、スムーズに答えを導くことができ、結果としてプロジェクトをま



図2 みんなでPDMを策定する様子

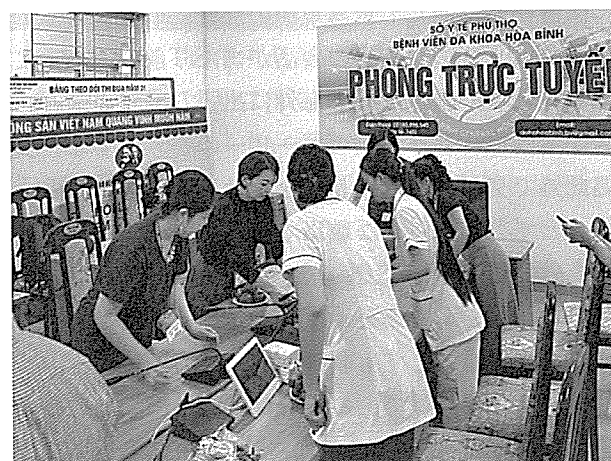


図3 両国のセッションの様子

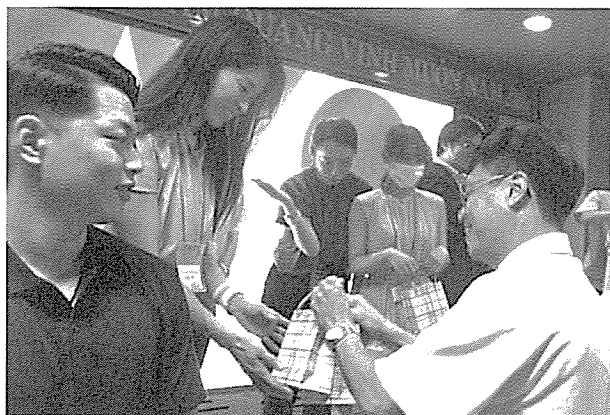


図4 発表会後にホアビン総合病院の副院長からプレゼントを受け取る研修参加者の様子

とめることに繋がった。また、互いに歩み寄ろうとすることで、最後には打ち解けることができたと思う。

発表会の後、其処此処で皆、互いにハグをし、頑張りを称え、別れを惜しむ光景が印象的であった。

私達は、無事にミッションを終え、滞在から6日目の夜ホアビンの街を後にした。

そして最終日、ベトナムの首都であるハノイで、当国最大の病院「バックマイ病院」を見学し、7泊8日の全研修を無事に終えた。

◇豊かさとは何か～ベトナム研修の贈り物～◇

今回の研修で私達は、コミュニケーションセンターから国家病院まで4つのランクの違う医療機関の見学、様々な文化視察・体験と大いにベトナムを知る機会に恵まれた。

この経験で、一つ気が付いたことがある。それ



図5 ベトナムからの贈り物のブレスレットを手に付けて

は、各所で出会う人々がみな笑顔で生きているということである。

ベトナムは、日本と比較するとまだまだ物質的な豊かさや衛生環境の整った国とは云い難い。しかしながら、そこに生きる人々は決して、その状況に落胆していない。むしろ生き生きとさえしているように感じる。

それは何故か。生活の中に、豊かに育まれた「心」があるからではないだろうか。ベトナムの人々には物売りの路上で、道を隔てた家々のバルコニーで挨拶や会話が絶えない。最大の豊かさとは「心のゆとり・心の交流」である。些細な日常生活の一コマからそう感じた。

世界では今、戦争が絶えない。戦争は、一つの事由を測る物差しが違う状況で、相手の物差しで物事を捉えることができないことに起因する。互いが互いを理解し、歩み寄ろうとすれば、平和に一步でも近づけるのではないか。また日本は、自死やハラスメントが急増し、人が人を信用できない、窮屈で、人に対して狭量な国になりつつある。「お金で幸せは買えない」というが、正しくその通り、物質的な豊かさと心の豊かさは必ずしも比例しないのである。

この学びは、ベトナムからの大きな大きな素晴らしい贈り物であった。帰国して、日常に戻った今、積極的に意欲的に物事やコミュニケーションに励みたいと思う、渡航前とは違う自分がいるのを感じている。同時に、如何に日本が物質的に豊かな国で、

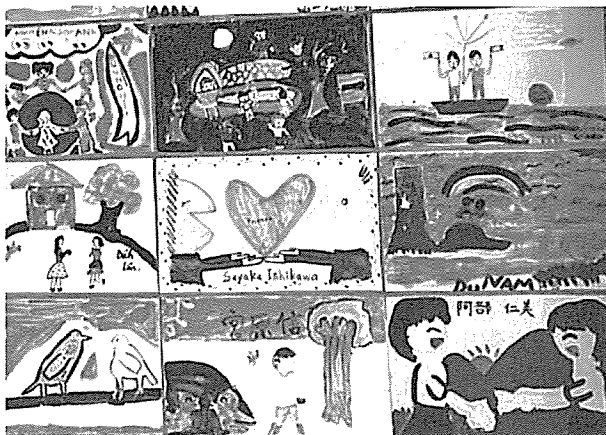


図6 バックマイ病院に飾られた在越日本人の子供たちのタイル絵 右上に日本とベトナムの国旗を持った両国の子供達が笑顔で手を取り合っている絵がある。ベトナムと日本の友好の証である。

恵まれた環境で生きているか、その中で心の豊かさを一層育んでいきたいと強く思う。

今回のフィールドトレーニングは、国際医療や公衆衛生について知り、世界で展開する様々な事業で用いる課題解決のプロセスを疑似体験したにすぎない。

しかし、この体験・学びが、こうした気づきを与

え、世界を変えるような大きな活動のきっかけ・一助に繋がるのではないかと、貴重な経験をできたことにとても感謝している。

「豊かさ」のヒントをもらった今回の体験を振り返りながら、私は今、笑顔でこの筆を置きたいと思う。

